

## ◆カラクリBOOKs

おらがまちの物語を後世に伝え残していく



おらがまちの物語を、後世に伝え残していくことを目的に活動している「カラクリBOOKs」と学生の活動が始まっています。

1月28日(木)は、カラクリBOOKsコーディネータの中根智幸氏と、社会福祉学部の岡多枝子教授、岡ゼミの学生2名による打合せが行われました。

美浜町に伝わる山林王「木原豊次郎」(右記参照)の一生を、音や動きなどのギミック(仕掛け)も入れて紙芝居風に再現し、電子書籍化します。学生たちは文献をもとに、対象とする小学校中・高学年から高校生が分かりやすいような文章を起し、この日はそれぞれが担当した各章の読み合わせをしました。

知多半島に伝わる偉人について情報交換をしたり、物語の切り口として、どのようなオープニングにすると読み手に興味をもってもらえるかなどを話し合いました。次回は、物語の絵を担当して下さる方へ挨拶に伺う予定です。(新保)

## 山林王 木原豊次郎について

1890年(明治23)知多郡河和町上前田で生まれました。祖母と2人で貧しいながらも、畑を手伝ったり草履や木の実を売ったりし生活していました。

14歳の時、北海道で雑貨商の奉公、歩兵隊、樺太でパルプ原木造材の請負業の経験を積み、妻ヨシと結婚しました。一度は東京での就職を試みたものの、北海道に戻り、三井物産木材部代理店に勤めることになりました。しかし、上司のやり方に納得がいかなかった豊次郎は、店を飛び出しました。

帰郷した際には、豊川稲荷での妻の一言により、事業資金として蓄えていた大金を寄付しました。たくさんの苦難を乗り越えながらも、45歳の時に木材業者としては1、2を争うほどの地位を確立しました。太平洋戦争の時には、船舶が軍に徴用され、乗組員への保証はなく、地元河和にも空襲があり、気を休めることはできませんでした。

終戦を迎え、造林業として事業を拡大し、社寺や学校への寄進を積極的に行いました。妻が病で去った後、仏門に入り「福祉の向上」のために公益事業に尽力しました。84歳で天寿を全うしましたが、彼の創業した「木原造林株式会社」「木原大和事業団」は、現在も活発な活動を続けています。

## どなベネット

## DoNabeNetチーム 参加学生募集中!

## DoNabeNetチームとは?

「鍋」をツールに地域交流を図る、学生グループ「DoNabeNetチーム」を結成しました。これから知多半島をフィールドに地域の皆様や私たちと一緒に活動していただける仲間を募集しています。興味のある方は下記連絡先までお知らせください!

まるもあゆき

連絡先: 社会福祉福祉学部4年 丸茂歩基

E-mail: donabe@ml.n-fukushi.ac.jp

「鍋」は地域交流のツールであり、鍋を囲む「場」で生まれたつながりは、きっと住みよい安全で安心な地域づくりにつながるはずです。是非ご参加ください!



※地域で活躍する学生の様子は  
本学のHPからもご覧頂けます。  
(次号発行月: 2016年4月)

見てね!



発行: 日本福祉大学全学教育センター地域連携教育部門

場所: 日本福祉大学美浜キャンパス研究本館1階サービスラーニングセンター

☎info@ml.n-fukushi.ac.jp ☎0569-87-2317 担当: 中野、新保

## 2015年度 各学部生の取り組み紹介



## ふくしAWARD2015

## ~69の応募の中から大賞輝く!~

ふくしAWARDは、「地域に根ざし、世界をみざす「ふくし」の学びを表現する場、また、知多半島にひろがるキャンパスをつなぐ場として、すべての学生がチャレンジできる機会」として今年度より新たに始まりまし



た。学生たちは、自身の問題意識をもとに、プレゼンテーションを行い日本福祉大学での「学び」を表現しました。日本語部門大賞受賞の石村未来さん(左から3番目)と日本語部門大賞受賞の久保みなみさん(左から4番目)のグループ

輝いた「『福島って海ないよね?』~子どもたちの日常と保養」(代表:久保みなみさん)の報告では、自身らの活動経験をもとに福島の子供たちには、安心して遊べる環境がないということが伝えられ、「保養」という取り組みがレジャーで終わるのではなく、子どもたちが心からリフレッシュできるようになるようにしていかなければならないという熱い思いが伝えられました。最後に、全学教育センター長の中村信次教授から、「相手に伝えるためには、2つの要素がある。一つは、技術やスキルであり、練習すればできるようになること。もう一つは、問題意識であり、これは個々の経験の中で育まれるものであり、大学の中だけでは培われないもの。今日の報告はどれも、問題意識が深い内容で素晴らしい。」と総評されました。

## ◆全学FDフォーラム

## ~アクティブラーニングの事例研究~

1月7日(木)、東海キャンパスで、アクティブラーニングをテーマに全学教育センター主催の全学FDフォーラムが開催されました。PBL(Project-Based Learning)の手法を用いて地域課題の解決を通して学習する「地域研究プロジェクト」の2つの事例が報告されました。

経済学部の遠藤秀紀准教授からは、東海市の中心市街地をフィールドにした「東海市デジタル生活マッププロジェクト」の取り組みが紹介されました。「限られた期間の中で実現可能な目標を、学生と一緒に設定すること」など、工夫した点が話されました。一方で、学生の「主体性」をどこまで引き出せるかといった点についても示唆がありました。

社会福祉学部の藤井博之教授は、「地域包括ケアに

おける多職種連携」を学ぶプロジェクトを立ち上げ、学生の主体性にシラバスの内容を委ねる「学習」と「教育」のジレンマについて話をされました。

また、実際にプロジェクトの学生が、講義の中で考案した「多職種連携ゲーム」を学生自身がロールプレイすることで、学びの成果を目に見える形で共有することが出来ました。この取り組みの中で学生は、「先生から色んなことを任せてもらったので、自分たちなりにやっていた中で、(自分自身に対して)自信を持つことができた。」と答えていました。



## ◆コミュニティ創成×福祉

～参加のデザインによる地域ケア支援～



昨年6月23日(火)、国際福祉開発学部の科目「現代福祉」(担当:吉村輝彦教授)では、特定非営利活動法人岡崎まち育てセンター

・りた事務局次長の三矢勝司氏によるゲスト講義が行われました。「参加のデザイン」という視点で、三矢先生がこれまで手掛けてきた事例が紹介されました。

参加のデザインは、①プロセスデザイン、②プログラムデザイン、③参加形態のデザインの要素から組み合わせで設計されます。被災地仙台市のプレハブ応急仮設住宅「あすと長町」の事例では、仮設住宅の中にどのようにコミュニティが創成され、発展していったのか、そしてその前提にある「グループ同居制度」が果たしたメカニズムについて、分かりやすく説明されました。

コミュニティの発達段階過程を、多様な移住者の集積→コミュニティの基礎固め→支援組織との協働実践→プラットフォーム形成→祭り・繋ぎの演出、と整理した上で、ここに「参加のデザイン」があったと説明されました。

最後に、「(地域の中にはいろいろな声があるが)自分の中に内なるビジョンが明確にあるから、それをカタチにすることができる。」とまっすぐなメッセージが届けられました。

## ◆経済学部「地域社会と共生」

経済学部の学生たちが太田川駅周辺エリアを歩き、まちづくりの現状と今後の発展について考える取り組みが昨年5月13日(水)に行われ、「地域社会と共生」(担当:遠藤秀紀准教授)を履修している1年生およそ150名が参加しました。

今回のフィールドワークは、事前に行われた東海市役所の担当者をゲストに招いた講義で市の総合計画や、東海市都市宣言の内容が説明されました。その実現に向けたまちづくりと、空間の創出が太田川駅東西の再開発地区でどのように進んでいるかを学生自身の目で確かめることを目的に実施されました。

当日は、太田川駅周辺を歩きながら、該当エリア内で指定された風景を探しながら撮影しました。学生たちは対象となる建物を指差しながら、渡された写真と同じアングルを探す様子が見られました。指定された場所には、昨年4月にソラト太田川内に開設された「Cラボ東海」や、どんでん広場の東側にある

山車蔵などもあり、各担当者から、Cラボの役割、山車の歴史などが学生に説明されました。

まちあるきに参加した学生の花園さんと白木さんは、「何気なく歩いていた駅周辺の地域には、これまでに気付くことがなかった場所がたくさんあり、住みやすい印象を受けた。もっとまちあるきをしてみたい」と感想を述べました。また、遠藤准教授は、「地域社会のなかで自らがどのような形で貢献していくのか、そもそも地域がどのようにして成り立っているのかを知るきっかけにしてほしい」と語りました。

## ◆中間リフレクションを行いました

社会福祉学部、子ども発達学部、経済学部の3学部において後期の授業の1コマを活用して、全学教育センターの佐藤大介助教が「ふくし・マイスター」の中間リフレクションを行いました。2015年度入学の学生からは、学部ごとに置かれた「地域志向科目」の中から10科目20単位以上を取得し、年度末に実施されるリフレクションを行うことで、「ふくし・マイスター」の称号が大学から与えられます。佐藤助教は、「ふくし・マイスターは資格ではなく、努力の証。大学で学んだことをしっかりとふりかえることで知識を自分のものにしてほしい」と、メッセージを送りました。リフレクションは、nfu.jpで単位取得を確認する際に、実施することができます。

## ◆地域研究PJ「こどものまちinちた」

昨年12月19日(土)、20日(日)、知多市ふれあいプラザで行われた、「こどものまちinちた～キッズドリームタウン～」(主催:KISSサイエンス事務局)において、

地域研究プロジェクトの子どもプロジェクト(担当:新美晃代講師)の学生が、サポーターとして運営に携わりました。

この取り組みは、仮想のまちを小学生と中学生が中心となり運営をすることで、主体的な社会への参画能力を養うことを目的とした取り組みです。吉田向日葵さん(社会福祉学部2年)は、「1日目と比べて2日目は、子どもたちが上手くまちの運営を行うことができていた。子どもたちの成長を感じた2日間だった。私たち大学生は、こどもと大人のつなぎ役であったと思う。と、子どもたちの成長とそこから得た学びを話してくれました。



## ◆サービスマーケティング報告会

昨年12月12日(土)、社会福祉学部2年次の科目「基礎演習」のサービスマーケティングクラスでは、活動先担当者も参加し、活動報告会を行いました。夏休みに活動を行い、後期は学生自身が問題意識や関心を持ったことをテーマにグループを再編し、それぞれのグループに分かれて研究報告をしました。



「ケースワークとは」「地域の人にとっての居場所って?」「応用行動分析(ABA)について」「障害児者の社会進出について」など、課

題の解決策や、活動先への提案も含め、学生ならではの視点で報告がされました。学生の報告が終了後、教員と活動先担当者で振り返りを行いました。日を重ねるにつれて学生の表情や挨拶の仕方が良くなっていったこと、学生が企画したプログラムを実施するまでの過程で失敗もあったが、そこから多くのことを学んでいたことなどがあげられ、活動先担当者、教員、学生ともに、この1年を振り返る良い機会となっていました。

## ◆看護学部基礎ゼミナール 発表会

看護学部1年生の基礎ゼミⅡの発表会が開催されました。1月5日(火)、12日(火)、東海キャンパスで行われました。東海市内の施設見学を事前に行い、グループごとに、「健康」をテーマに東海市の健康に関わる現状と課題を調査し、学生の視点から提案がなされました。

「高齢者の健康と閉じこもり」「セルフケアが難しいとされる人に対する食を通じた健康増進」「地域における関係の希薄化と災害時における高齢者支援」など、興味深い内容の報告が行われました。

「めざせ!健康寿命～みんなでつなぐ食育・運動～」という内容で報告したグループは、「健康寿命を日本一にするには」という課題設定のもと、東海市の現状を掘り下げ、「ふれあい」「食育」「運動」の3つの視点からとまとめました。

東海市健康推進課の天木氏からは、「学んでいく中で気づいたこと



があればぜひ行政にも伝えてもらうことで、一緒にまちをよくしていきたい」とメッセージが送られました。看護学部の山口桂子学部長からは、「看護師になると、問題を抱える一人ひとりの患者に対してしっかりと向き合っ、その問題を解決していかないといけない。今回の報告会を通じて学んだ視点を、活かしていけるようにさらに学んでいてもらいたい」と学生にエールを送りました。(中野)

## ◆福祉工学科バスツアー@奈良

昨年11月21日(土)、健康科学部福祉工学科バリアフリーデザイン専修の1年生が、奈良県の「庭暮らし研究所」を訪問し、自然と共生しながら暮らすことについて学びました。講師は、この研究所で暮らしを研究するガーデニング研究家の畑明宏氏です。研究所は法隆寺と同じ工法で作られていて、釘を一本も使っていない、筋交いがないなどの特徴があります。学生たちは、地震対策として、あえて弱い部分(土壁)を作ることで地震に強い家になることを学びました。

この日は、畑氏が行っている、薪割りや、しいたけの原木作りなどを体験しました。これまで体験したことがないことに手こずりながらも、いきいきと活動していました。畑氏の「環境とは他の生き物への配慮」という言葉が、建築士の卵である学生のこれからの学びに良い影響を与えることを期待しています。



## ◆亀崎まちあるきFW

1月13日(水)、健康科学部福祉工学科バリアフリーデザイン専修の1年生から3年生の学生14名が、「ここを改善すれば、まちはもっと魅力的になる」というテーマで亀崎地区を散策し、学生なりの視点で亀崎のまちがもっと魅力的になる方法を考えました。午後のグループ発表での振り返りでは、普段学んでいる建築の視点だけでなく、観光、福祉、亀崎で暮らす住民の視点など、様々な視点で活発な意見交換が行われました。その後亀崎で空き家再生プロジェクトメンバーの建築家の方や中心に関わる地元の方から総評をいただきました。実際に空き家利活用のための活動をしたいと感じた学生も多く、今後積極的に地域活動に参加していくことを期待したいです。